

書 評

島村一平編『大学生が見た素顔のモンゴル』  
サンライズ出版 2018年  
Shimamura, Ippei (ed.), *Mongolia Now:  
From the View Point of Undergraduate Students*

湊 邦 生

(高知大学)

MINATO Kunio

(Kochi University)

本書は滋賀県立大学人間文化学部の学生10名が、モンゴル国(以下「モンゴル」)での長期留学の経験を基に、自らが見た「素顔」のモンゴルを紹介しようとするものである。内容は学生らが現地でのフィールドワークや一次資料を踏まえて執筆した卒業論文について、四部構成に編集したものである。各部・各章のタイトルおよび執筆者は以下の通りであり、いずれも現代モンゴルの「素顔」に関わるものとなっている。

第1部 素顔の遊牧民

第1章 モンゴル遊牧民の子育て(平野あみず)

第2章 タイガと草原に生きる遊牧民—フブスグル県のダルハド遊牧民との生活体験から(西口佳那)

第3章 モンゴル遊牧民の馬の個体認識をめぐって—毛色を中心に(吉村友里)

第2部 街の素顔

第1章 モンゴル人のヘルール(口喧嘩)の技法(安藤晴美)

第2章 幽霊譚から読み解く現代モンゴル社会(北田昂大)

第3章 モンゴルの学校には「いじめ」がない?(柴田友登)

第3部 「伝統文化」の相貌

第1章 「伝統」という概念のゆらぎ—モンゴル舞踊をめぐる「伝統」観の世代間格差(今井冨香)

第2章 演じ分けられた民族音楽—モンゴル国における2種類のカザフ民族音楽の創造(八木風輝)

第4部 日本とモンゴルの接点を見つめる

第1章 比較してみた日本とモンゴルの歴史教科書—元寇・ノモンハン事件・第二次世界大戦(橋木佳奈)

第2章 柔道・レスリングは、モンゴル相撲の一部なのか?—ウランバートルのモンゴル相撲道場の事例から(平山開士)

本書のタイトルを見て、半世紀近く前に故小沢重男東京外国語大学名誉教授が記した『素顔のモンゴル』を想起する方も少なくないであろう(小沢、1970)。本書の編者もその存在は認識しており、その上で、「47年経った今、小沢先生とは別の意味で現代の日本人に伝えるべき『素顔』と呼べるものがあるのではないか」(「まえがき」より)との考えから、このタイトルをつけたとしている。では、その「素顔」とはどのようなものか。本書では「日常を生きる彼ら(引用者注:モンゴルで暮らす人々)の生の姿」(同)としている。モンゴルが日本との国交すらなく、その実態がほとんど知られていなかった時代とは異なり、モンゴルの知名度が上がり、情報が格段に増加した今だからこそ、それらの情報から見えてこない、人々の暮らしや思いを伝えることに意義を見出したのであろう。

加えて、「メディアや私(引用者注:編者)を含めた専門家が見落とした何かを彼ら大学生らが見つけてきたのではないか」(同)ということも、タイトルで「素顔のモンゴル」という言葉を使った理由として挙げている。編者が指摘する通り、モンゴルの専門家・研究者がモンゴルの人々の「素顔」を見落とすことや、そもそも関心が低いというケースはあり得る。そうであれば、権威や地位から自由な「学生」「若者」がその立場を活用し、都市・遊牧地域を問わず自らフィールドに赴き、現地を歩き、見聞きし、人々と関わることで、人々の日常に迫ろうとする行為は、現代モンゴルを理解する上で、間違いなく有効な方法の1つであろう。

以上からすれば、各章が卒業「論文」を基にしているとは言え、本書を評する際に、研究者による論考と同じ観点から吟味を加えることは、かえって的外れに思われる。まして、本書で示された発見や議論を、「卒論」=学術性の低いものとして退けるのは無益である。本書の価値を測る上での主要点は、学術性や研究としての質いかんよりも、むしろ学生たちが「素顔のモンゴル」に十分迫ることができたかどうか、そしてその「素顔」を、(巧拙はさておき)伝えることができているかどうかであろう。

そして評者が判断する限り、本書の10名の著者は、それぞれ上記につき成功していると言える。第1部第1章では、著者がモンゴル遊牧地域での子どもたちを見て浮かんだ疑問を出発点に、子育てや子どもの成長について観察を重ね、日本とは異なる「近代的な子ども」像を描いている。また、ときに否定的な目を向けられるウルギー(おくるみ、スウォッドリング)に対しても、それが残存する背景について、遊牧地域の実態を踏まえて論じている点は傾聴に値する。

第2章のフブスグル県ダルハド遊牧民のモノグラフでは、遊牧生活の日常や乳製品等、「専門家」にとっては既知の事物が少なからず登場する。しかし、それがかえってダルハドとハルハの遊牧の共通性を物語っている。もちろん、家畜管理や「オルツ」<sup>1</sup>の設営等、ダルハド独自の生活文化についても記されている。ただし、著者がウランバートルからの道中に受けたという「セクハラ」も、目を背けてはならない「素顔」である。

第3章は、モンゴルでウマの主要な識別要因となっている毛色について、フィールド調査で表現を収集し、カラーチャートを基にそれらの測定を試みたものである。カラーサンプルが示されていないのは編集上の都合とはいえ惜しまれるが、それでもいくつかの事例についてはウマの写真が示されており、確認することができる。ともすれば多種多様、膨大なものとしてのみ捉えられがちな

<sup>1</sup> ゲルとは異なる円錐形のテント。ここでは著者による表現を用いて表した。

毛色の区分に挑戦した果敢さには敬意を表したい。

第2部では、まず都市在住のモンゴル人の間で行われるヘルール (口喧嘩) について、仕事上のトラブル、警察官との対決、家族内の揉め事という3種類に分けて事例分析を行っている。モンゴル人の喧嘩の場面をわざわざ収集するばかりか、会話分析の手法を用いることで、そこからさまざまなヘルールの技法を抽出するというのは、喧嘩となれば巻き添えを恐れて距離を置こうとしてしまう評者にとって、驚嘆を禁じえない。

第2章はモンゴルで出版された都市の幽霊譚がテーマとなっており、著者は4つの物語を分析した結果から、社会主義体制崩壊後のモンゴル社会が、都市住民/地方住民、「勝ち組」/「負け組」といった両極分化を抱える中で、前者から後者への「転落」を描く幽霊譚を、そのようなモンゴル社会に警鐘を鳴らす存在として捉えている。非常に興味深い分析だが、物語の中で中国人や都市の独身女性が「転落すべき存在」として登場する辺り、モンゴルにおける反中国意識やジェンダー規範意識の業の深さを見出すのは、評者の牽強付会であろうか。

第3章はモンゴルに「いじめ」にあたる概念がないことに驚いた著者が、留学中にモンゴルの学校を観察し、その要因を探ったものである。その要因自体も重要な知見であるが、それ以上に、「いじめ」がないことを著者が固定的に捉えておらず、今後モンゴルでもこの概念が生まれる危険性を指摘できている点は特筆に値する。この点で、著者の議論はモンゴルにおける子どもの発達を理想化したナイーブな印象論と明確に区別される。

「伝統文化」に関わる第3部は、第1章で舞踏における「伝統」概念が、第2章でカザフ民族音楽がそれぞれ扱われている。第1章では舞踏関係者らへのインタビューから、「伝統」に(他世代はさておき)自らの創作行為も含まれるとの認識があること、他方で何に「伝統」を見出すかは世代によって相違があるが、いずれも社会主義時代に創造された概念に依拠していることを明らかにしている。本章で示された「伝統」概念の動学性を認識しておくことは、舞踊以外のモンゴル文化の諸断面を理解する上でも有益であろう。

第2章では、ウランバートルとバヤン＝ウルギー、さらにはカザフスタンでの「カザフ民族音楽」の相違という発見に始まり、モンゴルにおける「カザフ民族音楽」に、旧カザフ共和国からの移植とウランバートルでの「創造」という異なる経路で成立した2種類が存在することが示されている。さらに、前者の記述の中には移植された「カザフ民族音楽」の社会主義的ローカル化とでも称すべき過程もあり (pp.247-249)、モンゴルにおける「伝統」「民族」概念について、さらに深めるべき論点を提供している。

第4部も2章構成であり、第1章では元寇、ノモンハン事件 (ハルハ河戦争<sup>2</sup>)、第2次世界大戦戦中・戦後、1990年代以降の日本の対モンゴル援助に着目し、日本の複数の歴史教科書とモンゴルの国定教科書の記述の比較を行っている。元寇を除けば、モンゴルの教科書の方が日本のものよりも記述が厚く、この点に驚きはしない。たださればこそ、モンゴルの歴史教科書はモンゴルの人々にとって、日本との接点の中でもとりわけ重要なものと考えられる。そこでの記述について検討を加え、かつ本書刊行により日本の一般の読者層に公開したことの価値は大きい。

<sup>2</sup> 「ハルハ河会戦」と呼ばれることもあるが (評者も通常はこの訳を用いる)、ここでは著者の表現を採用した。

第2章は柔道・レスリングとモンゴル相撲の関係を論じている。モンゴルのアスリートがこれらの競技を並行して行うことに関心を抱いた著者は、モンゴル相撲道場でのフィールドワークや聞き取りから、柔道やレスリングはモンゴル相撲に対して「基礎」となるものであり、かつモンゴル相撲に包含される要素として捉えられることを明らかにした。モンゴル語でレスリングには必ず、柔道にもしばしばモンゴル相撲を表す「ブフ」が付されることから、言語上だけでこのことを推論するのは不可能ではない。しかしながら、推論はあくまで推論である。著者はモンゴルの格闘家の実践を通じて説得的な事実を提示しており、それこそが本章の功績と言えよう。

以上で見た通り、各章の著者は、自らモンゴルを体感し、人々と直接関わり、一次資料を集めることで、モンゴルの「素顔」を明らかにしている。それが可能となったのは、現地での長期滞在や言語能力に加え、「日本の若者」（「若者」だけでも良いかも知れないが）だからこそという部分はある。正直に言えば、もはや「若者」と呼ばれることがモンゴルにおいても稀になった評者は、その点について著者らに羨望を禁じ得ない。

その上で、著者・編者のテーマを逸脱することを承知の上で、本書から派生する新たな論点として、2点を付け加えたい。第1点は調査手法に関するものである。本書のうち、第2部第2章と第4部第1章はテキスト分析によるものであり、それ以外の全ての章はフィールドワークに基づいて展開されている。このような事例的／質的調査<sup>3</sup>は、関心のある人々や事象の「現場」に自ら赴き、自ら体感的知見を得るという点で、「素顔」に迫る方法として理解しやすいものと言えよう。

その一方で、この手法と並ぶ統計的／量的調査に基づく研究、つまり調査票調査や統計データ分析を駆使するアプローチによって、「素顔のモンゴル」に迫ることもまた可能ではないだろうか。むしろ、事例的／質的調査と統計的／量的調査は対立的と言うよりも相補的なものであり、ならばそのような手法を用いてこそ見える「素顔」もあると考えるべきであろう。本書の「まえがき」と共通するが、量的調査法に親和的な社会科学的研究において、「素顔」に対する関心が低かったり、モンゴル人のモノの考え方や心性が等閑視されたりすることは確かにあろう。しかしながら、これらは研究者の態度の問題であり、必ずしも研究手法に起因するものではない。そればかりか、調査データの収集や統計分析を通じて「普通の」人々の姿や社会の現実を描き出す取り組みは決して奇異なものではなく、モンゴルも調査対象となったことのある国際調査プロジェクト「アジア・バロメーター」や、日本の計量社会学において行われる「計量的モノグラフ」による研究が、そのような例として挙げられる（The AsiaBarometer, n.d.; 尾嶋, 2001 等）。このようなアプローチによって「素顔のモンゴル」に迫ることは、編者らよりも（現在の）評者のような研究者に課せられた義務であるが、本書を通じてあらためて確認できたことから、あえてここで記しておく次第である。

第2の論点は、本書の著者らにとっての「素顔のモンゴル」とは何であったか、ということである。より具体的に問うなら、著者らをここまでモンゴルに「のめりませた」ものは何か、その背景や要因とは何か、そしてモンゴルについて学ぶ過程で得たものは何か、ということである。言わずもがなであるが、モンゴル語やモンゴルへの長期留学で得た知識が卒業後の経済的利得に直接つながるケースは、現在も相当少ないであろう。巻末に記された著者らの進路を見ても、モンゴルとの関連

<sup>3</sup> 煩雑さを避けるため、ここでは事例的調査と質的調査の差異については触れない。後述する統計的／量的調査についても同様である。

を見出し難いものが多い。それにもかかわらず、モンゴルに関心を持ったばかりか、長期留学や卒業論文執筆にまで至った動機や背景とは何か。そしてそこで得たもの、発見したものは、それぞれが成長する上で、あるいは卒業後の進路を切り開く際にどう作用したのか。あるいは、そもそも作用したのか。著者らをはじめ、編者のゼミ出身者たちに問うてみたい欲求に駆られる。

もとより、上記の問いは評者個人の思いつきである。ただ、モンゴルに関する教育や研究の現状と将来について考えるのであれば、このような問いを避けるわけにはいかない。日本では大学教育・研究の危機的状況が叫ばれ、とりわけ(一時ほどではないにせよ)人文系学部・学科に至っては存廃すら危ぶまれる昨今である。日本以外でも、モンゴル研究に対する若手の参入の少なさが問題点として指摘されているのを評者は耳にしてきた(湊、2017)。

そのような中で、モンゴル研究・教育が今後も生き残っていくには、モンゴルを学ぶことにどのような価値が見出せるのか、これから大学教育を受ける若い世代に伝えられるようであればならない。そのような価値が理解されてこそ、学生がモンゴルを学ぼうとすることや、モンゴル研究に若手を呼び込むことにもつながるはずである。

もちろん、モンゴルに関する知識自体が目先のメリットにつながり難いのは先述の通りである。とすれば、モンゴルを学ぶことの価値は、すぐに活用可能な知識・スキルの習得という次元を超えたところ、すなわち高等教育や学術研究が本来の価値を有すべきところに見出すことになる。

これは決して簡単なことではない。加えて、何に価値を見出すかは個人によって異なるため、具体的なものは一概に言いづらい面もある。とはいえ、自ら進んでモンゴルに飛び込んだ学生たちが、自らの時間や労力等、さまざまなコストを支払ってでもモンゴルを学ぶに値すると考えた理由は何なのか、そして学生たちが学び取ったものがその後の人生でどう生きているかを問うことは、今モンゴルを学ぶことの価値を探し出す上で、大きな手がかりとなるのではなかろうか。

編者のゼミでは、今もさまざまな学生たちがモンゴルを学んでいることであろう。その過程から、また学生たちが新たな「素顔のモンゴル」を見つけてくることであろう。そのような取り組みが、学生それぞれにとっての価値を生み出すことを願って止まない。その先にこそ、モンゴル研究・教育の将来があるものと期待されるためである。

## 参考文献

- The AsiaBarometer [n.d.] . *The AsiaBarometer Website*. Retrieved September 17, 2018 from <https://www.asiabarometer.org/>
- 湊邦生 [2017] 「国際学会ニュース 第11回国際モンゴル学者大会『モンゴル研究と持続的発展』大四部会(対外関係研究)」『日本モンゴル学会紀要』47: 101
- 尾嶋史章編 [2001] 『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房
- 小沢重男 [1970] 『素顔のモンゴル』芙蓉書房。

(全304頁、ISBN978-4-88325-632-7)